令和 7 年度第 2 学期始業式式辞

おはようございます。

さあ今日から 2 学期のスタートです。夏休みは有意義に過ごしましたか。1 学期の終業式で話した、「アウトプットの学び」に挑戦できましたか。授業が始まると、インプットの学びも増えますが、アウトプットの学びとの両面を意識しておくとよいですね。2 学期は文化祭、体育祭をはじめ学校行事で協力をし、キャリア教育を通じて進路意識を深める時期です。充実した毎日を送りましょう。

さて、穎明館生の皆さん、今年、2025 年は、穎明館高等学校創立 40 周年の節目の年です。今日は、「創立 40 周年に思う」と題して話したい。よく聞いて、穎明館の歴史や文化に思いを馳せてほしいと思います。

穎明館の創立者、堀越克明先生は、1982 年（昭和 57 年）9 月 10 日に新設開校を決意されました。9 月 10 日は堀越克明先生ご自身の誕生日であり、創立記念日でもあります。そして、開校準備の 2 年半の月日を経て、1985 年（昭和 60 年）4 月 5 日に高校 1 期生 51 名の入学式が行われました。2 年後の、1987 年（昭和 62 年）4 月 7 日には、中学 1 期生 67 名を迎えて、中高 6 年一貫教育もスタートしたのです。この日は私にとっても、穎明館での教員生活スタートの日でした。以来、40 年もの月日を経たことに、大変感慨深いものがあります。

まずは開校当初の学校案内パンフレットに掲載されていた創立者、堀越克明先生のお言葉を紹介します。

明治 10 年、近代日本の黎明期に本校の教学の祖である堀越修一郎は、新しい日本を担う人材の育成を願って、『穎才新誌』という自由投稿誌を創刊し、維新後の士気旺盛な若人の才気を啓蒙することに努めました。この『穎才新誌』の投稿者の中から、後の世の文学、政治、経済他、各界で活躍した人々を数多く輩出したことを知り、わたくしは祖父の創業の志に思いを馳せずにはいられません。

日本が国際社会の一員として重要な役割を果たすようになった今、わたくしもまた教学の祖の志を受け継ぎ世界の中の日本という新たな視点から、到来する 21 世紀を見すえた新しい学校づくりを思い立ち、ここに穎明館中学高等学

校を創立いたしました。

優れた資質を秘めた向学心旺盛な若人を受け入れて、来るべき 21 世紀に国家を担い、国際社会に羽ばたく真のリーダーを育成するという志のもとに、本校では Experience（経験）、Morality（道徳）、knowledge（知識）を教育の柱とし、今後さらに教育環境を充実させ、生徒一人ひとりの能力の開発に努め、日本のみならず世界を舞台にして活躍できるような人材を育成することに力を注いでまいりたいと思います。

穎明館生の皆さん、開校当初の創立者のお言葉はどうでしょうか。開校後、この建学の精神に基づき、学校としての成長・発展を着実に遂げてきました。開校当初は、進学校として世間に認知してもらうために、試行錯誤を重ねていました。正課外補習、70 分授業、週番活動……当時は何事も教師主導で厳しい学校生活だったと思います。クラブ活動は全て同好会活動であり、対外試合についても抑制的でした。定期試験では赤点を取ったら、次の定期試験まで活動禁止という規定もありました。それでも勉強を頑張り、難関大学に合格して「誇れる進学校にするんだ」という意識で生徒も教職員もまとまっていたように思います。

一つの転機は、1997 年に創立 10 周年を記念して、無窮館ができた頃でしょうか。開館式では、初代校長でもあった堀越克明先生が、穎明館のモットー、「仁智は無窮。穎才を研きよき地球人たれ」についてお話されたことが、印象に残っています。無窮館には「多くの本を読んで、教養を高めてほしい、知性を磨いてほしい」という願いが込められています。皆さん、大いに読書に励みましょう。

また、無窮館の開館式には、2 代目校長になる久保田宏明先生が初めて来校されました。久保田校長先生は、「穎明館は、すでに 10 年間で進学校としての基盤ができている」と考えられ、「学校主体から生徒主体へ」と舵を切りました。生徒会を発足させ、文化祭や体育祭を現在の形にし、クラブ活動も盛んにさせました。すなわち、穎明館の生徒主体の校風ができたのは、21 世紀に入ってからと言っていいでしょう。そのことを象徴するかのように、21 世紀記念館も造られました。保護者活動の「緑の会」の前身である「2001 父母の会」も発足し、学校生活、教育活動が豊かになったことを思い出します。

久保田校長先生が勇退された後の、第 3 代校長は岡本武男先生でした。就任当時 90 歳とは思えない、エネルギッシュさで、校長就任期間はわずか 2 年間で

したが、確かな爪痕を残しました。校長 HR 行脚で説かれた、道元禅師の「切に思うことは必ず遂ぐるなり」等、私自身が、いまだに強い影響を感じています。

そして今から 10 年前、2015 年、第 4 代校長の寺山政秀先生の時に、穎明館は創立 30 周年を迎えました。高校棟正面玄関の記念碑や無窮館前の創立者胸像は、30 周年記念で創られたものです。寺山校長先生は、英語の先生らしく国際交流部を発足させて、イートンカレッジサマープログラムをはじめ、各種のグローバルプログラムの導入にも尽力されました。温厚な寺山校長先生の下で、副校長としていろいろと学べたことは幸運でした。

「創立 40 周年に思う」――自分が校長ということもあって、どうしても歴代の校長先生との思い出が中心になります。そして自分は「創立者や歴代の校長先生からのバトンをしっかりと引き継げているのか」と自問すれば、「まだまだ、これから」との答えが、自分の胸に響きます。昔の卒業生からも、「校長先生、期待していますよ。頑張ってください」と発破をかけられます。私こそが、まずは今後の 10 年、50 周年に向けて、学校改革「EMK 未来プロジェクト」をより一層、リードしなくてはとの決意、覚悟です。

ところで 6 年生、39 期生の皆さん、受験勉強、大学受験も過去の先輩たちが同じように通った道です。穎明館では卒業後も長く仲良くしている先輩方が、多くいます。あなたの隣の友は、生涯の友になるかもしれない。きっとこれからの入試本番までには、精神的にも辛い時があるでしょう。「受験は団体戦」です。ともに乗り越え、互いの合格を心から喜び合えると信じています。

頑張れ 6 年生、39 期生！いつでも応援しています。

今日は「創立 40 周年に思う」と題して、私なりに穎明館の歴史と文化を振り返りました。穎明館には生徒、保護者、教職員はじめ、学校の歩みに関わってきた、すべての人たちの思いも込められていることを、心にとめておいてほしい。とくに 6000 名ほどの卒業生は、創立者のお言葉に応え、建学の精神に基づくかのように、社会の様々な場でリーダーとして活躍されています。在校生の皆さんや、皆さんの後に続く未来の穎明館生も、伝統をふまえ、また新たな穎明館の歴史や文化を創ることを、心より期待しています。

以上、令和 7 年度第 2 学期始業式式辞といたします。